

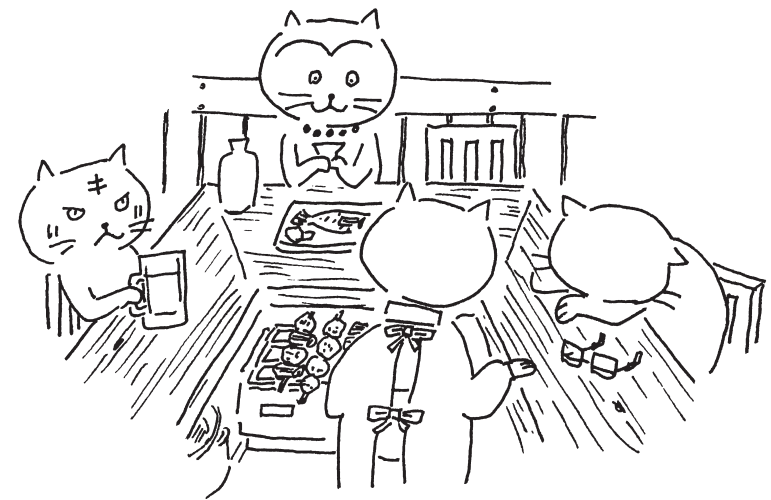
# ネコと酒

加藤ジャンプ

(文筆家、コの字酒場探検家)

黒猫。キジトラ、マボロシ・ネコ……。

取材先で触れあった三匹のネコの残像と温もりは、ツマミがわりにもなる。何千という酒場を訪れてきた、コの字酒場探検家が綴る、酒場とネコの記憶。



## ネコ・ファースト

ネコが好きだ。

先日、ある職人さんを取材していたときのことだ。現場は職人さんの作業場だった。ネコを三匹飼っていた。一匹は人なつこい黒猫。もう一匹はキジトラのブチでちよつと素っ気ないタイプ。三匹目はきわめて人見知りで、二秒ほど姿を見せただけでついぞ顔を出してくれなかつた。

温もりは、たまらない充実感を与えてくれて、ときどき私は恍惚感から、今が一体なんの時間か忘れそうになった。肩は凝り、襟元は毛だらけになったがまったく気にならなかつた。

もう一匹のキジトラのブチはというと、黒猫が行きずりの私とあまりに蜜月状態になっていたのに嫉妬したのか、気づけば膝の上に乗っていた。両手に花というが、上下に花であった。これほどモチることは、この先そうはないだろうと思いがら、私は必死に仕事をした。

取材を終えた帰り道、職人さんから教えてもらった酒場に立ち寄り一杯やることにしたら、お猪口を持った手がつつた。酒に溺れた男の今際のきわのように、お猪口が震えた。

おそらく、私はひどい撫で肩なので、ネコの居心地が良いように、なるべく肩をいからせようとして自然と肩から腕に力が入っていたのだと思う。人生ネコ・ファースト。その結果、薬指はピンと張り、薬指と中指が不自然にくっついた状態になり、それは、かなりの苦痛だったが、悲鳴をあげる肉体とは裏腹に、お猪口のなかで震える日本酒を見て私は誇らしく思っていた。

その夜は、ツمامもあまり多く頼まなかつた。いつもなら、ツمامはたらふく食べる。その結

たマボロシ・タイプだった。

ネコは人間を二種類に判別する。ネコを好きなかそうでない人かだ。黒猫はそのセンサーが過敏というか、ゆるゆるで、まだ会っていきなり膝の上に乗ってくれた。それから、ほどなくして、お腹の上にアゴを乗せる半分立つたような姿勢になった。それから今度は腕のなかへとポジションを徐々に上方へと移した。そして、出

果が、ふつから柔らかな私の肉体になっているわけだが、その夜は、件のネコの残像と温もりの記憶が、ツمامがわりになった。猫好きにかぎったことだが、ネコはダイエツにも効果的かもしれない。

## ネコと酒は相性がいい

酒好きは猫好きが多いと、初めて酒場のことを書いた本を出したとき、写真を撮ってくれた写真家のAさんは言っていた。

「酒好きはさ、ネコと路地が好きなんだよね」昨年、彼は遠いところへ行つたが、そこでは先に旅立った愛猫とも再会し鯨飲していることだろう。たしかに、ネコと酒は相性がいい。

たぶん、何千という酒場を訪れてきた。酒場で飼っている生き物という筆頭は金魚や熱帯魚だろう。これらは水槽におさまっている。客も、水槽から離れていれば安心していらる。以前通っていた焼き鳥屋にはほぼ水槽の大きき一杯に成長した金魚がいて、ほとんど鮎にしか見えなかつた。水をはったガラスのケースのなかについて、私が呑んでいる間中じつと動かないそのさまは、生きたまま剝製に

なっているようで、すこし忍びなかつた。その焼き鳥屋は、野良猫にも餌をやっている、金魚がいなくなつたとき、私はちよつとだけ、その野良を疑つた。ただ、追及することはできなかった。ネコと金魚を、飲み屋で裁判することになつたら、私は公平でいられる自信がない。

いっぽうで、ネコは酒場においても自由を謳歌している。自由という言葉では堅すぎるほど、気儘に過ごしている。

横浜の関内(かんない)だつたか、座布団にじつと座っていて座布団にちよつかいを出すと激怒するネコがいた。ただ、それも相手次第なところがあつて、だいたい、突然動きが激しくなる人や声が大い人が座布団に触れたときにかぎって、体を持ち上げて猫パンチを繰り出す構えを見せた。ただ、私が知るかぎり、そのネコは威嚇はするものの、実際に客を叩くことはなかつた。その距離感が、酒場にはよく似合う。

これも横浜の、日吉(ひよし)にいた、客を一瞥すると必ずダッシュするネコは、カウンターの隙間から顔をのぞかせ、こちらをじつと見つめるくせに、目が合うと一目散に駆け出す。可愛いからじつと見たいのだけれど、そうすると逃げ出すので、こちらはなるべく横目というか、ほとんど白目だけで件のネコの姿を確認するのである。